

睦月都歌集

『Dance with the invisibles』

(角川書店)

見えないものたちと踊る。「Live with (ともに暮らす)でもなく、「Survive with (ともに生き抜く)」でもなく「Dance with」であること」この歌集のしなやかな本質が表れているように思える。

春の二階のダンスホールに集ひきて風をもてあますレ  
スピアンたち

わたしたちの定員二名の箱舟に猫も抱き寄す 沈みゆ  
かなむ

彼女たちは裾を春風に翻しながら、沈みゆく舟に猫を抱きしめながら、ひそやかに、したたかに自分たちの存在を慈しみ、信じている。新しい土地を目指す箱舟を捨てて、愛するもののためにこの世に残ることを選ぶ。

まだ青いどんぐりの実が落ちてゐる ふざけてゐて落  
下した子供

君を救ひにする物語全部嫌 西陽 テラリウムへ  
満ちてくる

この世は見えざる者たちで満ちている。マイノリティーを生きること。社会的、性的少数者はマジョリティーからは見えざる者ゆえ、少数者ゆえに見えている景色があり、彼女たちにはあまりにも小さすぎるこの世界でひととき互いを祝福しあって踊っている。

待望の第一歌集。

(小島なお)

松村由利子著

『科学をうたう センス・オブ・ワンダーを求めて』

(春秋社)

生活に不可欠な科学技術の世界に、一步踏み込んでうたうことができたらどんなに素晴らしいだろう、と思うことがある。本書は約三百首を選び、歌とその科学的な背景をわかりやすく紹介する。

マウンテンゴリラ減りゆくいきさつに食肉となること  
書かれをり 大松達知

感染症対策に複雑に絡み合う問題のひとつとして、ブツ  
シユミートの歌を引く。  
杖つきて歩く日が来む そして杖の要らぬ日が来む君  
も彼も我も 高野公彦

歩いたり食べたりという当たり前の営みも、よくよく考えれば本当に素晴らしいことだ、と述べる。  
星空の星にあらざる流星の身を焼く光ぼうとよぎりぬ  
田宮朋子

流星の科学的な事実にあわせて、源氏物語を引用しての  
解説をしていて興味深い。  
魂入るる仏師のごとくわが少女ヒューマノイドのプロ  
グラミングす 藤野早苗

パソコンに向かってあれこれとコマンドを打ち込んでい  
る姿である、と理解しやすく語られている。  
幅広い作品を通して知識を深めるのは楽しい。科学に親  
しみ、歌の表現に新たな道が見えてくる。

(柴田佳美)